

実習基礎（空間）における空間構成

Space design in basic practice

造形表現学科 大木 敦子

造形表現において空間を認識するという事は学生が各々の作品に対する客観性を持つことと同時に、自己プロデュース力を養う上でも重要である。「何をつくるか」と同時に「どう見せたいか」にも重点を置き、授業に取り組んだ。また空間そのものを作品の重要な要素として捉え、作品に内包される空間や、作品の周りの空間をどう構成するか、に加えそのあり方を作品の主体として見せる方法を考察し授業内で実践した。空間を認識することによって、立体表現やインスタレーションだけでなく、平面作品においても表現の幅が広がると考える。

造形表現学科一年時の実習基礎（空間）の授業では、空間における表現方法の基礎を学ぶことを目的とし、身の周りの自然物や人工物の観察、抽出を通して魅力的な空間を構成し、表現する方法を実践した。

授業内では観察をすることから始め、ボックスの中の空間を通して学生が作品と空間に対してどのような認識を持っているのか分析した。またグループワークで個々の作品に対して発表を行った。

1. 課題の意図

実習基礎（空間）では、「体験すること」に重点をおいて授業を進めた。学生自身が持っている既知の技術・知識・体験に、新たな視点と操作を加えることで作品制作に広がりが生まれる。全くのゼロからものが生まれることはなく、身の周りを観察すること、素材を触ること、手を動かすこと、そして他者の意見に耳を傾けること、そこから「気づき」があるかどうか重要である。

3週という少ない回数の中でどれだけの「気づき」があるか、そこから制作につながるプロセスを体験する内容とした。

<支持体>

- ・ A 2 黒スチレンボード

W 450 × D 300 × H 200 mm のサイズでボックスを作成する。ボックスの向きは自由とし、それぞれの制作意図に合った方向で使用する。

<使用素材>

- ・ 線材（綿糸、ナイロンテグス、針金、ミシン糸、等）
- ・ 棒材（竹ひご、竹串、楊枝、等）
- ・ 面材（ケント紙、コピー用紙、トレーシングペーパー）
- ・ その他課題に応じて適宜素材を持参する。

2. 課題シート

実習基礎B 空間

担当：大木敦子

概要

空間における表現方法の基礎を学ぶ。身の周りの自然物や人工物の観察、抽出を通して魅力的な空間を構成し、表現する方法を実践していく。

授業の中でグループワークを行う。グループ内で意見を出し合うことにより、自分の視点と他人の視点の違いや共通点を見つけ出し、また共有することにより、空間に対する視野を広げていく。

第一週：観察を通して空間を見る目を養う。

- 身の回りの空間における構成要素を見つけ出す。
 - ・ 自然物や人工物の形態を観察し、スケッチしたものの中から特徴を抽出する。
- ボックスの作成 (W450×D300×H200mm)
 - ・ 使用材料：A2 黒スチレンボード
- スケッチしてきたものの中から空間を構成する要素を抽出し、ボックスの中で再現する。
 - ・ 使用材料：竹ひご、糸、テグス、コピー用紙、ケント紙、等

☆ 持参：クロッキー帳、筆記用具、カッター、はさみ

第二週：与えられた空間と素材の特徴・関係性を捉え、表現する。

- ボックス (W450×D300×H200mm) 中の空間を、線材、面材等を使い構成する。
 - ・ 与えられたテーマで空間を構成する。
 - ・ 使用材料：用意された材料に加え、持参したものも使用可能とする。
- グループワークで互いの作品についての意見を出し合う。

☆ 持参：材料、クロッキー帳、筆記用具、カッター、はさみ、等

第三週：与えられた空間と光の関係性を捉え、構成する。

- ボックス中の空間を、自由に構成する。
 - ・ 使用材料：前回の材料に加え、持参したものも使用可能とする。
- 光、照明の効果でどのように空間が変化するかを捉え、表現に取り入れる。
- 視点を変えて空間を観る。
- グループワークで互いの作品についての意見を出し合う。
- まとめ、講評

☆ 持参：材料、クロッキー帳、筆記用具、カッター、はさみ、等

3. 実習内容

(1) 観察と抽出、空間を構成する要素

身の回りの空間を「見る」という行為を、スケッチを通して体験する。ここではデッサ力ではなく、どの視点でどんな空間に興味を持ったかに重点をおき、なるべく多くのスケッチを描く。他の授業でもスケッチをすることは多いが、同じものを見ても視点がちがうということを認識しながら描くことが重要。木々の枝振り、花びら、建物の柱や配管、またそれらがどのような配置になっているかなど、自然物、人工物の構成の中に興味を持つものを見つけどんどんスケッチをしていく。

スケッチしてきたもののフィードバックをすることによって、学生自身がどのような視点で対象物を見てきたか、客観的に分析する。

スケッチに出かける前にどのような視点で見たらよいか。次にあげるキーワードを提示した。また視点を変えてものを見ることを課題とし、通常の視線の他、見上げる、見下ろす、など視線の高さを変えて観察する。

キーワード	整列、分散、集合、放射状、連続、繰り返し、分割、奥行き、間、回転、螺旋、光、影、反射、透明、コントラスト、等
視点	見上げる、見下ろす、屈む、等

(2) 再現と再構成

スケッチしたものの中から要素を取り出し、与えられた空間（ボックス W450×D300×H200mm）の中で再構成する。素材は用意されたもの（線材、棒材、面材等）の中から2点まで使用可とする。

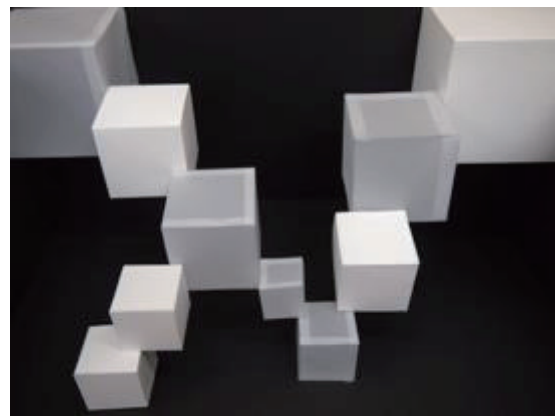
スケッチから要素や形態を的確にとらえられているかどうかで作品の質が変わってくる。

この点が理解できていないと単純な風景の再現に留まる。既存の要素（形態、色彩、配置、等）の中から抽出し、再現ではなく展開するということが理解できるかどうかがこの作業のポイントである。

<作品例>



線材（綿糸）を使った構成。
線の集合体で曲面を表現している。
使用素材は1つだが線から面、そして立体へと3つの段階の変化がよく表現できている。



面材（ケント紙・トレーシングペーパー）を使った構成。
立方体の大小でリズム感を表現した。同じ立方体でも素材感の違いを出し、変化を持たせた。



線材（テグス）を使った構成
ナイロンテグスの張りを利用し、曲線で構成されている。素材の特徴を生かした作品。



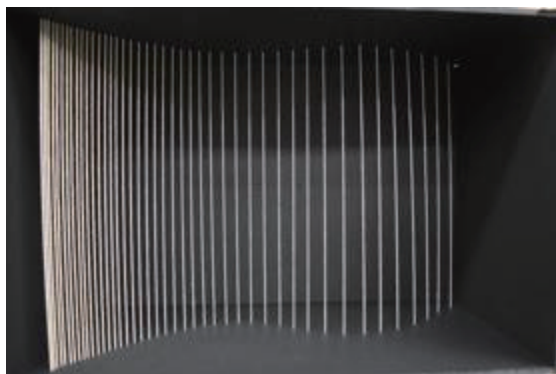
線材（綿糸）を使った構成
線材を前後、左右、上下の方向性で構成し、2次元のイメージと3次元のイメージが混在した作品。角度を変えると見え方が変わる。また素材の扱い方についても工夫がみられ、綿糸が互いにテンションをかけることで接合点がすっきり見える。

(3) 与えられたテーマで空間構成をする

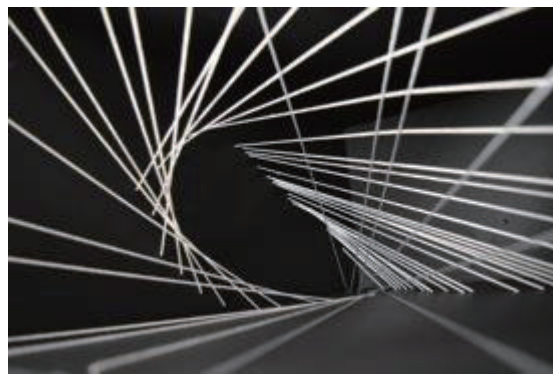
①グラデーション

グラデーションという言葉は通常配色に関して使われることが多いが、ここでは色彩にとらわれず、形態の変化等に 응용して制作する。形の大小、長短、遠近、角度など、どこに変化対象を持ってくるか、もしくはそれらの組み合わせも利用して制作する。

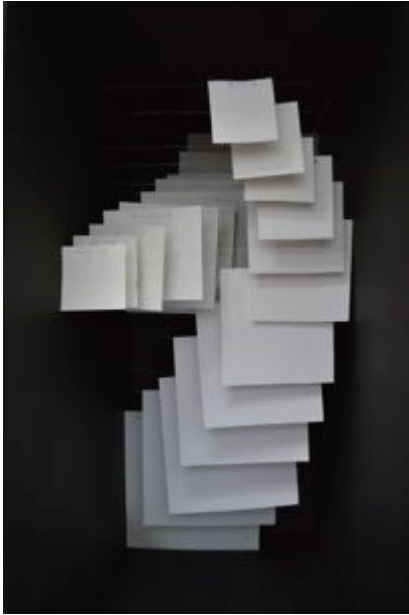
<作品例>



線材（綿糸）の構成
配列、間隔の変化。線で密→粗をつくる。
シンプルな構成ではあるが課題の意図を的確に捉えた作品。



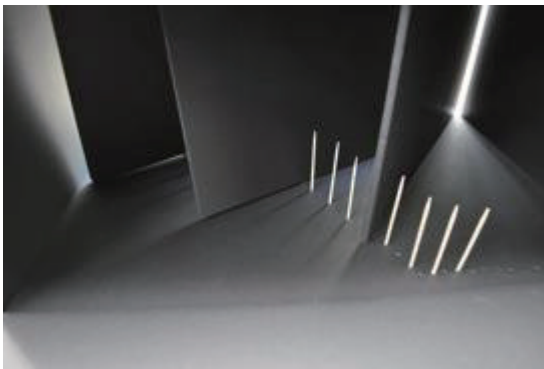
線材（綿糸）の構成
角度の変化。直線の重なる部分が曲線に見える。また、前後の変化が視線を奥に誘導し、奥行きを感じる構成になっている。



面材（ケント紙）の構成
それぞれの正方形は平面であるがサイズの変化に加えて前後関係も変化させることによって、立体感も表現できている。



線材（綿糸）の構成
線の粗密に加えて線材そのものに加わるテンションを調整し、直線→曲線の変化を表現した。



板材がつくる陰影での構成。
角度を考えながら板材と棒材を使い、空間の構成物そのものではなく、陰影でグラデーションを表現した。



面材と線材（綿糸）の構成。
トレーシングペーパーを重ねることでの2次元でのグラデーションと組まれた綿糸が徐々にほぐれていく様子を同時に表現

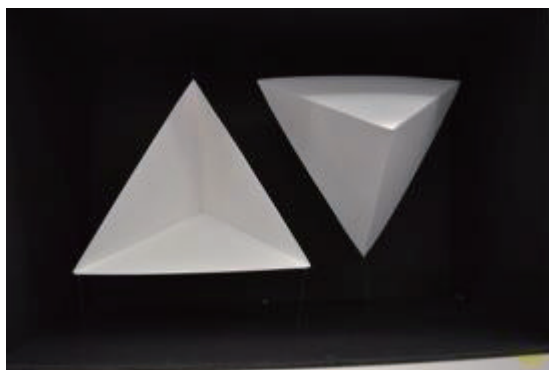
②コントラスト

グラデーションの課題同様、色彩のみに頼らず制作する。

素材感や明暗の差異を利用し、構成要素の中でどこを対比させているのか明確にする。

グラデーションの課題に比べ、ボックスの黒色に対して白色の面材を利用した作品が多く見られたが、空間そのものの「有」と「無」を巧みに表現できた作品も見られた。

<作品例>



形のコントラスト
三角錐の頂点を凸にするか凹にするかで変化を出した。



素材の違いのコントラスト
対角線に区切ることによって線の三角形、面の三角形に加え空間の形も三角形にしている。



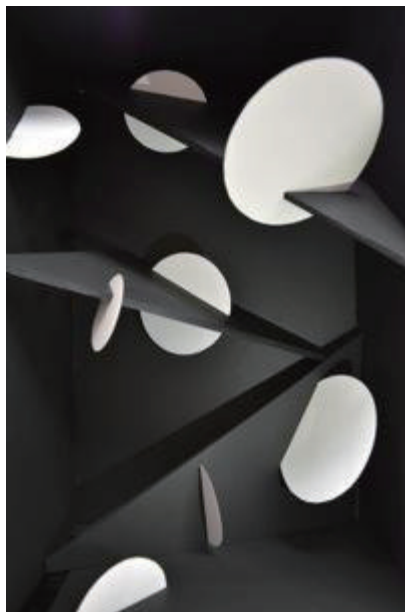
白と黒の空間のコントラスト
ボックス内を手前が白、奥を黒にすることで空間の広がりが生まれている。



白の面と黒の線のコントラスト
白の輪郭線が画面奥に視線を誘導するため遠近感が誇張される。



面と線のコントラスト
左の空間に面を集中させることで右側の空間が際立っている。



円と三角形のコントラスト
円形と直線が交差することで空間に緊張感が生まれている。

(4) 空間に光を取り入れる

空間構成に限らず、人間はものを視認する時必ず光の影響を受ける。ここでは光が空間に与える影響と、素材との関係、光源の違い等をふまえて制作にのぞむ。

ボックスに採光のためと視点のための穴を最低2カ所開ける。開口部の大きさ、数による変化や、角度を変えるとどう見えるか等、光による効果を取り入れた作品を制作する。

素材はあらかじめ用意されているものに加えて学生自身が自由に持参することとした。

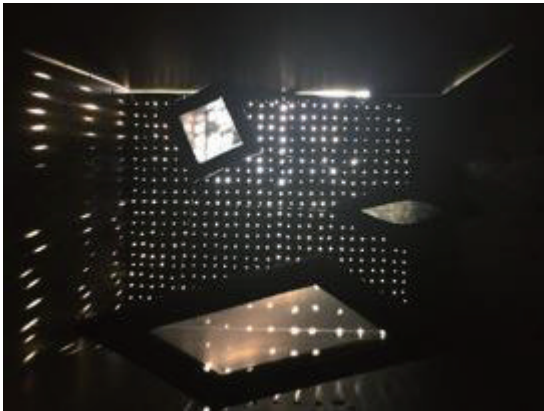
<作品例>



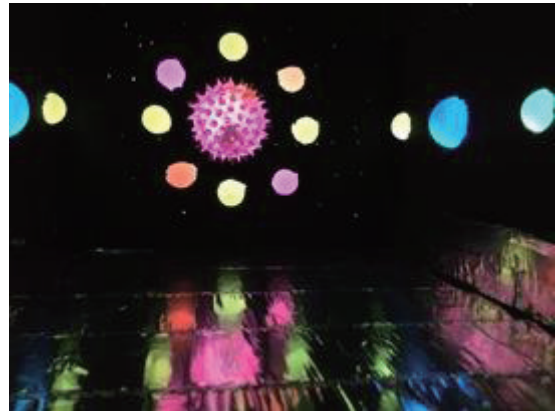
採光部の円形から入る柔らかい光と、線で構成された円形に光が当たりシャープなラインとの対比が際立つ。



ストローを使った構成。光がストローを伝わって入ってきている。ストローの断面がいっそう明るく見える。



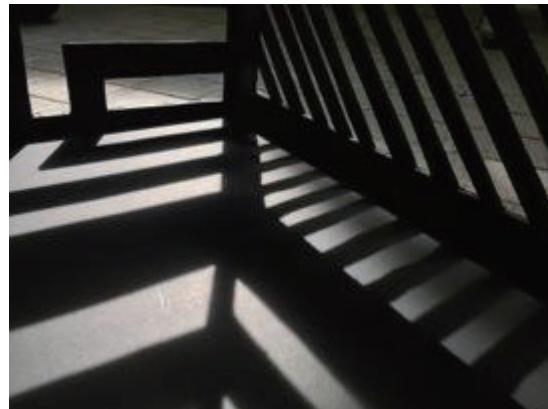
規則的に並んだ採光部の穴から直線的な光を取り込み、側面や手前のプレートに投影させている。



カラーのゴムボールを採光部に嵌め込んだ作品。アルミテープに反射させることで空間に広がりを持たせている。



ボックスの背景に見える風景を作品の一部として取り込んだ作品。直射日光ではない自然光を取り込む。シンプルな中にも建築物のようなダイナミックさを感じる。



ボックスそのものを光と影の箱として1つのオブジェとして制作した。直射日光により影を強く出すことでオブジェクトと影の境目が曖昧になっているところが興味深い。

4. 素材との向き合い方

すべての課題を通して、素材が持つ特徴と向き合うことをしてきた。線材については太さ、柔らかさ、張り、自在に曲げられるもの、光沢のあるもの。自在に曲げやすいことで針金を使う学生が多いが、接合部分をきれいにまとめられていないと作品の質に影響する。また面材に関しては紙やボードの使用面積が空間に与える影響をよく考えることが重要である。

どの素材にも共通することとして、今回の課題のような小さい空間では接着や接合の仕方、切り口など、丁寧な作業が求められる。

用意されている素材だけでなく、学生自身が素材を探すことも1つの課題とした。ただし、プリント柄の紙や布、キャラクター、ビーズなど、すでに第三者のデザインが入っているものは避け、素材になりうるものを選ぶこととした。

5. グループワーク

個人での講評とは別に、自己プレゼンテーション能力を鍛える第一歩として、学生自身が作品について説明をする機会を持つ。グループ内では互いの作品について意見を述べることとした。

造形表現学科のカリキュラムではチームで作品を作り上げる授業があるが、実習基礎の授業は開講時期が一年生の前期であり、チームで作品をつくることがまだ少ない時期にあたる。しかしこの時期から学生同士が互いの作品について会話をする機会を持つことが重要と考える。講師側からの作品の講評ではなく、近い立場の人間と意見を交換する習慣を持ち、授業の中だけではなく普段の生活や会話において常に感性を磨きあう関係性を築くきっかけとなしてほしい。社会人に求められるチームワーク力の第一歩は互いの意見に耳を傾けるところから始まると考える。

6. まとめ

実習基礎（空間）の授業では参考作品は提示せずに授業を進めてきた。それは学生自身がまず空間に対する認識がどれほどあるのか、もしくはないのかを体験することから始まり、そこから様々な要素の組み合わせや展開につなげてきた。空間とは常に私たちの身の周りに存在している。日頃から周りの景色や建築や作品に興味を持ち、この授業を通じて学んだ視点で見てほしいと考える。

今回の授業で作成したボックスはサイズがW450×D300×H200mmという小さいものであった。しかしこのサイズだからこそ出来る自由な表現につながったように思う。上下、左右、前後の方向を容易に変更

し、作品を眺める角度を変えられることから既成概念にとらわれない新たな気づきがあった。

次のステップとして広い空間でダイナミックな表現をしてほしいと考えるが、その一端として、一学年の基礎科目である「基礎造形」での課題に展開することが出来た。



課題「風と遊ぶ」では屋外の空間を使い造形表現を試みることにしているが、これらの作品は実習基礎の課題から空間を構成することを学び、その経験がいかされた作品となった。

等身大の作品やフィールドが大きくなると自立や固定の問題に直面することとなる。しかし技術的な問題に臆することなく、ボックスの中での空間構成の経験が自由な発想の源になり、恐れずに造形表現に取り組んでほしいと願う。

参考文献

- ・ 森竹巳 編 (2011) アートとデザインの構成学
- ・ 川添善行 (2014) 空間にこめられた意思をたどる
- ・ 小林重順 (2002) 新版 造形構成の心理
- ・ 小嶋一浩、伊藤香織、小池ひろの、高安重一 (2011) 空間練習帳